

## 30代A医師は感染後すぐ回復したが、なぜか患者の名前が覚えられなくなり…新型コロナウイルス最新研究からわかった「持続・潜伏感染」の恐怖

4/21 宮坂 昌之 定岡 知彦

「新型コロナウイルスは風邪のようなもの」と思い始めた人も多いただろう。

しかし、決してそうではないことが最新研究から明らかになりつつある。

新型コロナウイルスがほかのウイルスと異なる「きわめて厄介な性質」とはどんなものなのか。

### 新型コロナウイルスは持続感染をするのか

最新の研究で、新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）は、流行を繰り返すありふれた風邪ウイルスとは異なる、きわめて厄介な性質を持つことがわかってきた。このウイルスがいったんからだに取り付くと、簡単には追い出せないことがあり、持続感染や潜伏感染を起こす可能性があるというのだ。

先に説明したとおり、新型コロナウイルスはからだの免疫をまぬがれるいくつもの仕組みを持つ。また、ウイルスに対していったんできた中和抗体が時間とともに減少する。これらのことから、もしウイルスが免疫による初期防御によって重篤な症状はまぬがれたとしても、その後、体内で長期的に生き延びる可能性がある。

つまり、このウイルスは持続感染を起こす能力を持っているのだ。最近、その可能性を支持する報告が相次いでいる。

たとえば、新型コロナ感染発症から約200日後に嗅覚消失を訴える患者で鼻腔上皮にウイルス抗原（N抗原）とウイルスRNAが検出されている。また、新型コロナ感染から100～400日後に後遺症症状を示す患者がたまたま手術を受けたところ、虫垂、皮膚や乳房組織にN抗原（ウイルス抗原によって作られた抗体）やウイルスRNAが検出された。

ほかにも、新型コロナ感染から約7ヵ月後まで糞便中に持続的にウイルスRNAが検出された例や、新型コロナ感染から3ヵ月以上経った後遺症患者の3～6割で血中にスパイクタンパク質が検出されたという報告が複数ある。

感染から治癒した後あるいは後遺症症状を示さない人では、通常は血中のスパイクタンパク質は陰性であることから、持続感染している人の体内のどこかにウイルスが潜んでいて、それが長期にわたってスパイクタンパク質を放出している可能性が示唆される。

また、検出されたウイルスが発症時に見られた当時のものであって、その後流行した変異株とは異なることから、ウイルスに再感染したのではなく、元のウイルスがそのまま残っていた可能性が考えられる。

非常に極端なケースではあるが、イギリスでは一度SARS-CoV-2に感染した人が亡くなるまでの間、505日間もウイルス陽性だったという報告がある。

自覚症状のないままウイルスに感染し続けるというのも、気持ちの良いものではないが、問題はそれだけにとどまらない。新型コロナウイルスに持続感染や潜伏感染すると、さまざまな慢性疾患になるリスクが高まるのだ。具体的な例で説明しよう。

### 回復して職場復帰したのに、どんどん異変が…

大学の消化器外科に属しながら大学院博士課程を終えて2年前に博士号を取得したA医師は、日夜張り切って診療と研究に励んできた。学生時代はラグビーの選手だったが、医師になってからは仕事が忙しくて運動する時間がまったくとれなかった。一方、食生活だけ

は変わらず、以前同様の大食だったので、30代半ばにしてたっぷりとお腹が出て立派な肥満体になっていた。

そんなA医師が半年前の冬に新型コロナウイルスに感染した。

幸い、若くて体力のあるA医師の回復は速く、すぐに熱が下がり、退院して職場に復帰した。ところがその後、体調がなかなか戻らない。論文を読んでも頭に入らず、外来で処方箋を書こうとしても薬の名前がなかなか出てこない。1~2ヵ月すれば良くなるかと思っていたが、次第に症状が進み、だんだん患者の名前が覚えられなくなった。

さらに症状は悪化し、ついには自分がどこにいるのかもおぼつかないような状態になってきた。同僚に話したところ、すぐに検査を受けるべきという。

急いで検査を受けたところ、なんと脳に血管が詰まった箇所（梗塞巣）がいくつも見つかった。新型コロナウイルス感染をきっかけに血管の内皮細胞や血小板が影響を受けて血管が詰まりやすくなり、そのうえに肥満という危険因子が状況を悪化させ、脳の細い血管がところどころ詰まっていたのである。

現在、A医師のような症例が世界から相次いで報告されている。最近の研究から、ウイルス感染を起こすと、たとえ症状が軽いものでも、脳梗塞、アルツハイマー病やパーキンソン病などの種々の神経系疾患が発症しやすくなることがわかってきた。ご存じのとおり、こうした神経性疾患には良い治療法がほとんどない。

つまり、運が悪いと、新型コロナウイルスに感染したことが引き金となって、「不治の病」になりかねない。潜伏感染・持続感染するウイルスを追い出せないと、こうしたリスクを残りの生涯を通じて背負い込むことになる。

最近もうひとつ心配な話がある。それは新型コロナ感染をすると、すでにからだに潜んでいた別のウイルスが活性化されそのウイルスのために症状が出現し、それが新型コロナ感染の後遺症のようにみえるという報告である。

本書の第4章で詳しく触れるが、EB（エプスタイン・バー）ウイルスや水痘・帯状疱疹ウイルスのようなヘルペスウイルスは、いったん感染した後体内に潜んで何十年も生き延びる。そして、そのような潜伏ウイルスが新型コロナ感染によって再び活性化して悪いことをする可能性も指摘されているのである。

「このウイルスはたいしたことがないから、積極的に罹って免疫を得たほうが良い」などという意見を軽々しく言う人がいるが、新型コロナウイルスはとても気安く感染しても良いものではなく、感染自体に大きなリスクがある。

また、後遺症の一部がウイルスの持続感染や潜伏感染によるものであるならば、積極的にこのウイルスを排除することが効果的な治療法となるはずである。

ウイルスはそこにいる  
宮坂昌之 定岡知彦

ヒトは  
ウイルスと共に  
生きている

免疫学者とウイルス学者が  
タッグを組んで生命科学最大の  
フロンティアを一望!

- なぜ感染すると病気に？
- ミクロの世界で繰り広げられる驚きの攻防戦とは？

60  
歳以上の読者

講談社現代新書